



洋書輸入協会会報

Vol. 27 No. 7 (通巻314号) 1993年7月

理事会報告

6月18日(金)

(一) 5月分収支報告

6月8日(火)付、総務委員会での検討に基づき総務委員長の報告を承認した。

(二) 委員会報告

シンシナティ市で開催の SLA 年次大会への参加と Mr. Basch 講演の JBIA セミナー「外資系外国雑誌取次業の国際戦略について」の概略が山川雑誌 NM 委員長より報告された。

(三) 改訂規約について

5月14日の総会で修正が加えられた箇所の変更について石原規約改訂委員長より文書による提示があり確認

のうえ承認した。

(四) 総会報告

定時総会の報告については会報6月号で行うが、各委員会報告の内容を含めた詳細を別途郵送する旨、高橋総務委員長より報告された。

(五) その他

イ. 第14回国際英語教材展に JBIA の後援名義を使用させることを承認した。

ロ. 定時総会と同時開催の懇親旅行は成功裏に終わり文化厚生委員会の次の活動として7月中にビアパティを計画している旨吉本委員長より報告された。

海外ニュース

ドイツの書店で4000人の顧客アンケート実施

ドイツ最大の出版グループであるベルテルマンが昨年9月に行った書店での来客に対するアンケートの結果が先日公表された。

アンケートは、比較的規模の大きい50の書店において4000人に対してインタビュー形式でおこなわれた。それによると、3986人の潜在的購買者のうち2400人が実際に本を購入(冊数にして3422冊)、1600人が何も買わずに店を出ていた。約40%を占めるこの1600人のうち、約3分の2(62.5%)は特に目当てはない、ただ本を見にただけ、と答えている。

「書店の敷居は客にとって高いのではないか？」という疑問はかなり前から議論されてきたテーマだが、それについては、今回のアンケートの結果をみると杞憂と言えそうである。が、反面なかなか厳しい状況も見え隠れする。

購買を意図して来店した客の60%は、探していた本が店に無かったと答え、17%は店員に特定の分野の本について尋ねているが、その半数は満足のいく答えがえられなかったとしている。いわゆる、お得意様がどのくらいを占めるかについては、4000人中16.5%の人が今回のアンケートが行われた書店だけを目標にやってきたと答えている。

本を買う直接のきっかけはどこで得ているか、という質問については、出版社の宣伝部を驚かせるような結果

理事会報告	1	文化厚生委員会だより	3	海外こぼれバナシ(1)	5
海外ニュース	1	おしらせ	3	うちの会社	6
洋書輸入協会懇親旅行	2	東南アジアの出版事情	4	東京の坂と橋と文明開化(37)	7

が出た。

全体の58.4%の人が、購入のきっかけは書店で、と答えており、書店以外で情報を得た人のうち28.4%が人に薦められたり口コミで、18%が広告で得た情報がきっかけで買ったと答えている。これに対してベストセラーの番付表がきっかけとなっている人はわずか1.8%ときわ

めて少なかった。

本の出版点数が多すぎると感じると答えた人は全体の2割程度で、77%の人が新しく出る本が多いのは、読書の意欲を刺激すると答えている。

—Börsenblatt '93年5月11日より抜粋—
(株)紀伊国屋書店提供

箱根湯本一箱親懇協輸入書洋

今回の懇親旅行は、JBIA 史上始めて総会との共催となった。総会と懇親会とは表裏一体のものであり、総会で一旦顔を合わせて、「では、又、日を改めまして」と云って別れるのは、どうも不合理ではないかといった意見が出たことに始まる。文化厚生委員会のモットーは、“百杯のお茶より、一杯のお酒”である。建前より本音で、相互の意見交換をしたいということである。だから、総会のすぐ後に懇親会というのは、極めて合理的だと全員一致で決まった。理事会の方々も、「そうだ。そうだ。」と言われたかどうか知らないが、「まあ、いだろう。」ぐらいのニュアンスでOKがでた。

総会との併催となると、時間・場所に制限が出る。「駅近・交通至便・会議宴会可」でないといけない。更に、「ゴルフ・テニス完備」も考慮しないといけない。いくら行きたくても、秘境の温泉は駄目である。かくて、必要条件を満たした箱根湯本に決まった。

昨年の懇親会は、熱海で行われて、33名の参加と報告されている。今回は、60名の参加を得た。宴会場が一望出来る限界は100名位だと思う。だから、一応まとまりのつけられる人数であった。残念ながら、海老原理事長は、昨日海外出張から帰国されたばかりとのことで、ご参加を得られなかった。

宴会は、紀伊国屋の吉本文化厚生委員長の発声で乾杯を行い、綺麗どころが入場し、あちこちで歓談が始まり、公の場だった総会からの解放感が満ちてきた。芸こさんの踊りが始まった頃は、もう相当酔ったらしく、どんな踊りか忘れてしまった。

今回の宴会も、東亜ブックスの鶴さんが企画・演出の中心となった。鶴さんのことを軽々しく「よっ、宴会部長!」と呼ぶ方も多いが、宴会を上手に運営するには、勿論その場の盛り上がり誘う陽気さと演技が必要だが、

そういう表面的なものだけではない。ホテル予約の時点から始めて、電車の中、ホテルの部屋割り、宴会の席割り、催し物、二次会等々大変な気配りを必要とするものである。宴会論について書くのが主旨ではなかった。とにかく、その鶴さんの司会で、カラオケ大会が始まった。ちゃんと、賞品も用意されている。又々、申し訳ないのだが、MYWの平野さんが確か一番バッターだったと思うし、ロングマンのオズボーンさんが「川の流れるように」を歌われたこと位しか覚えていない。身近かな人や知り合いが歌っている時位しか関心を示さないのがカラオケの短所であり、それを補って余りある長所である。

かくて、知らぬ間に2時間余が経ち、一次会はお開きになった。2次会は、ホテル内のクラブに参加者の大半が集まって結構盛り上がった由だが、私は、その頃麻雀部屋で必死に睡魔と戦っていたので、その間の事情は良く分からない。大過無く終わったようである。勿論、明日のゴルフやテニスに備えて、本宴会の後直ちに休養・睡眠を取られたかたや、更に3次会へ進んだ方などは、世の宴会と変わらないので割愛する。

翌朝は、前日のシトシト雨と打って変わっての好天気であった。ニコニコ顔のゴルフ組を見送って、残りの方々と朝食を取り、その場での懇親会終了とした。

後始末をして、小田急の急行に乗ったら、OECDの水谷さんと一緒になった。水谷さんは、割りと早くホテルを出て、登山電車等で、芦ノ湖あたりまで足を伸ばして来た由。春というより初夏を思わせる陽気で実に爽快であったという話をききながら、又々申し訳ないことにウツラウツラと寝てしまった。乗換の登戸で起こして貰うまで気がつかなかった。

(紀伊国屋 尼子 記)

第68回72会ゴルフコンペ

仙石ゴルフコース 1993. 5. 15(土)

前日14日(金)のJBIA総会と懇談会を兼ねた箱根湯本富士屋ホテルに於ての旅行も無事に終わり、第68回72会ゴルフ大会当日は、昨夜の雨を吹き飛ばし、雲一つない青空の太陽が、私達ゴルフ仲間を迎えてくれました。当、仙石ゴルフコースは大正6年に英国人コルチエスター氏の設計により、オープンした由緒ある名門コースです。全体的にコースはフラットで、箱根連山の新緑、青々とした樹木、緑の芝生、真っ紅な躑躅、等々が透き通る様な青空に映えて、とっても快適な春のゴルフ日和りでした。今回の初参加は丸善の中田さんと尾内さん、それに紀伊国屋の高井さんの3名。72会も回を重ねる毎に賑やかになります。第68回大会の優勝の栄冠は、安定したショット・パットそれにバーディをもぎ取った日本出版貿易の中林さん、72会コンペ初優勝お目出とうございました。

準優勝は美声とソフトムード、ゴルフはステディ三拍子揃った丸善の中田さ

ん。3位はベストグロス賞といっしょに紀伊国屋の日和田さん。4位はグロス90前後の記録更新中の文化厚生委員長紀伊国屋の吉本さん。5位はF1顔負けのA級ライセンスを持つ紀伊国屋の高井さんでした。第68回大会は終わってみれば、上位は全てJBIAの理事会社に独占されました。次回は理事会社以外の方々にも是非頑張ってもらいたいものです。幹事も努力します。

(記：東亜ブック 鶴)

成績表

		グロス	ハンデ	ネット	新ハンデ
優勝	中林三十三(日本出版貿易)	87	12	75	10
2位	中田 安昭(丸 善)	95	20	75	18
3位	日和田早苗(紀伊国屋)	86	8	78	7
4位	吉本 明城(紀伊国屋)	92	14	78	
5位	高井 省吉(紀伊国屋)	96	16	80	
ベストグロス賞 日和田早苗(紀伊国屋)					
ドラコン賞 佐川美貴夫(三 善)					
ニアピン賞 中村 啓司(大洋交易)					
西山 久吉(西山洋書)					
西山 久吉(西山洋書)					

おしらせ

次の通り移転通知がありましたのでお知らせします。

インターナショナル トムソン パブリッシング
ジャパン

新住所：〒102 東京都千代田区平河町2-2-1
平河町共和ビル3階

TEL：03-3221-1385/1386

FAX：03-3237-1459

(双方共従来通り)

会報の合本ができました

洋書輸入協会会報、通巻第201号(1984年1月)より300号(1992年5月)の合本ができました。9年間の協会の推移をつたえる資料として、ぜひ一本をお備えください。

合本第3号 クロス装 価格(送料込み) 5,000円

なお合本第2号(101号/1975年9月~200号/1983年12月)の残部も僅少ながらもまだあります。ご希望の方には下記の通りの特価で提供します。

合本第2号 特価(送料込み) 2,500円

合本第2号+第3号 一括御購入の場合
特価(送料込み) 7,000円

(ご注文には、別紙「注文書」をFAX又は郵送で事務所宛お送りください)

東南アジアの出版事情

穂高書店 青 柳 健

当社はアジア・アフリカの書籍雑誌の専門店として、25年も営業してきたが、今だに良く解らない所もあって、本を集めるのに苦労している。年に一度か二度は現地に出掛けて、出版物を実際に見て集めてくのが実状で、欧米のように、目録の総合的な情報もなく、細々と出版社のカタログを集めて、当社は仕入本のカードを作り、カタログを出している。

中でも台湾は日本に近く、多くの人々が出掛けているのにもかかわらず、総合カタログも出てなくて、また何でも輸出してくれる取次店もないので、相変わらず、個々の出版社のカタログを取って、そこに直接注文する方法にたよっている。また一時ほどの古書の復刻版も大ものが少なくなっているようだ。恐らく、東南アジアの中では現在一番の経済発展をとげているようだが、出版の面では、むしろ活動は低迷しているように思える。ただ、台湾の購買力は盛んになって、或る蔵経の出版社の話では、大きなセットが、日本で約100セット売れたのに対し、台湾では250セット売れた由で、以前とは逆転している数字で、喜んでいた。経済的発展の恩恵であるうと思えた。

タイでは、段々と出版活動が盛んになっているようである。特に近年英文版が多く出て、タイ文字の読めない私などには嬉しいことである。タイの蔵経も何種類か出版されている。ここでも同じように、輸出専門の取次店は少なく、そうかと言って、個々の出版社では、特に少数の輸出はしてくれないので、本を集めるのがむずかしい国である。一ヶ国200点〜300点ぐらいずつ集めてカタログを作っているが、タイ文字をローマ字に直して、更に訳をつける作業は困難で、時折、訳は抜かしたカタログを作っている。又36度の炎天下で、本を集めに書店をかけめぐるのは苦しいことであった。

今年はラオスに行ってきた。ビエンチャンと言うのは村で、まだ外国資本は少ないようだが、ホテルも満足なものがない。ガランとした木造りの部屋に寝台が一つという殺風景なホテルに四日過した。外国へなど本を売ったことがない様で、とにかく、あるだけの本を2冊ずつ買ったが、約200点しか集まらなかった。本代が350ドル、エア・フレイト代が1,300ドルだった。ところが驚いた

ことに、数日後旅行から帰ってみると、本屋の主人が、自分で飛行機に乗って、私の買った本を手荷物で日本まで運んで来てくれた。フレイト代は彼の旅行費用でまかなってくれたのかも知れない。四日間は、どうやって外国に本を売るか、出版はどのようにすれば良いかという講義に費やされた。その熱意は強いもので、近々良いものが出るのではないかと期待している。

去年はカンボジアに行ってきた。プノンペンには貧しい所だったが、UNTAC 景気に活気づいていた。本屋というものはなかった。広場の屋台に、なわで吊るして本を売っていた。土の上にどっかりと腰をおろして、屋台のバアさんが、題名と値段を記入してくれるのを、汗をふきふき見守っていた。取引はドルであった。恐らく外国人値段で買わされたことだろう。買った本を車につんで、郵便局に運び、荷作りをして航空便で日本に送った。紙もなく、ひももなく、いいかげんにしばって送ったが、何と全部届いたのには驚いた。しかし、二度と同じ本を買うことが出来ないのは悩みの種である。

そこへ行くと、他のアセアン五ヶ国は楽である。長年の本屋の友人が多く、私が行くと、選書の方法も送り方も知っていて、スムーズに本を買うことができる。クアラ・ランプールでも300冊ぐらい買った。マレーシアは、自国語を主に普及しようと言うので、マレー語の出版社も多く、また古典も出版している。ただ、私はマレー語は良く理解できないので、種類と出版社、出版年くらいをたよりに選書することになる。毎年来ているので、多少ダブるのは仕方のないことである。午後になるとものすごいスコールが来て、道は川となって、いつも帰りのタクシーを探すのに苦労する。しかし南国の大らかさがあって、味わい深い国である。

シンガポールはあまりマレー語の出版はしていないようである。やはり小さな国なので、出版点数も少ない。300冊集めるのには苦労する。しかし、英文出版はそれなりに盛んで、良い本も出ている。年鑑類が多く出ているが、これは売るのに苦労する。欲しいお客様は予約で買ってもらっているが、やはり見た目に良い本を多く集めてしまう。売れ残ったら大変である。当社はリー・クアンコー前首相「中国・香港を語る」という本を出版す

ることになっているが、案外この辺から見ていた方が、極東情勢が見えるのかもしれない。街並も美しく経済も盛んで、アジアのカナメとしての地位は益々重要になるだろう。

ジャカルタの発展の目ざましいのには、来る度に驚かされる。大きなビルが建並んで、もう大都会である。出版活動も盛んで、大きな本屋があちこちにある。しかし私の友人の商社マンがここで数年働いていたが、「果たして膨大な投下資本が回収できるかと考えると悪夢のようだ」と言っていた。この繁栄の一面をのぞき見るような気がする。とにかく浮かれているように見えた。出版も盛んで、特に外国本の訳本が多く、アガサ・クリスティなどはインドネシア語で何十冊もでている。『将軍』などもある。こういう訳本はアセアン各地に出ていて、日本のコミックなども訳されている。日本語の学習書も多い。又インドネシアの地方言語の辞典、地方文化研究書も数多く出ている。国が豊かになったら、こういう研究書はぜひ多く出版してもらいたいものだと思っている。オマール・カイヤの「インドネシア文化の旅」を当社は日本語版としてインドネシアで印刷して出版することになった。行く度に見積が高くなっていくことは、全くやり切れない思いだが、日本の方々に高度成長の陰で滅んでいく地方の文化、風俗を知ってもらいたいと思っている。どうやら、それを滅ぼしているのは、日本の巨大な資本投下の故ではないかという気がした。もう疲れて、いいかげんに本を集めて、これはどうかと勧めしてくれる友人に断り続けたが、忽ち300冊位は集まってしまった。全く本は無限である。

マニラはまた暑い国である。石油がない由で、電気が

毎日何時間か停電になる。クーラーがないホテルの部屋ほど住みにくいものはない。逃げ出したくなるが逃げる所はない。炎天下クーラーの利かない車で選書に出掛ける。又も汗をふきふき本を選ぶことになる。フィリピンもそれなりに出版しているが、やはり少ないようである。どうしても、かつての売れた良い本を集めてしまう。辞典は地方言語も含めて、かなり出ているが、やはり、英文の本が多いようである。タガログ語の本も出ているが、新しいものは少ないようである。しかし、まあ何とか300冊位は集めることが出来た。マニラでは、92年の東京国際書籍展の折りに招待した長年の友人がつききりで面倒を見てくれる。他の店で買った本も、彼が集めて日本に送ってくれる。各地にそういう友人がいるので大変助かっている。長いこと東南アジアの本を集めてきた本屋の冥利に尽きる思いである。

私の東南アジアの出版旅行は、その国の本屋の人々との交流の旅でもある。観光地などは行ったことがない。もう本屋しか知らないということになる。食べものはどこへ行っても中華料理があるので助かる。だいたい、ゲテもの食いだから、エスニックな食事もあるが、やはり一番うまいのは台湾料理である。台湾に着くと、朝から乾盃だが、大して気にならない。次はシンガポールの中華で、私は香港、北京はその後だと思っている。飲みすぎた翌朝のオカユは最高である。

(4月24日より5月12日まで東南アジア訪問し、台湾、タイ、ラオス、マレーシア、シンガポール、インドネシア、フィリピン。各国のカatalogを作っていますので、ご請求下さい。割引も差上げます。)

(以上)

海外出張零れ話

ホテル請求書にご注意

それは1年半程まえの、フランクフルト・ブック・フェアへ出張した時の話である。主な目的は別にあった。日程がぎりぎりになって決まったために、航空券とホテルの手配はその筋にお願いして、JTBブック・フェアのグループ・ツアーへ入れてもらえたのは幸いであった。ツアーと言うのは不便なものだとばかり思っていたが、さにあらず、全く何から何まで面倒を見てもらえて、こんな楽な事はないと言うのが実感である。ホテルも一流の、STMの会場となった処で、かなり豪華で、且つ安全そのものと言った快適な雰囲気満足したものである。

ところが、ここに一つ落とし穴があった。

一週間が緊張と、多少の余裕の内に過ぎ、やや残念な気持ちになりながら重いスーツ・ケースを引きずってCashierへと急いだ。筆者は、と言っても日本人は多分殆ど、支払いに当たって請求書を丹念にチェックすることはないと思う。しかし殆どのアメリカ人は先ず間違いなく丁寧にチェックをしてからでないかと支払わないようである。たまたま、この時には例外的な事を行った。本能的に危険予知能力が働いたのかも知れない。

第一行目、其処には、ラウンジ名は思い出せないが、「Restaurant/Bar DM××××. ××」と言った記載があった。それはホテルに到着した日である。JTBのチャーター・バスは、幾つかの他のホテルに客を送りとどけた。筆者は最後の4人グループの一人で、添乗さんがチェック・インに手間取った事もあり、部屋へ辿り着いたのは現地時間で午後9時を回っていたと記憶している。何時もの通りにホット・シャワーで汗を流し、さっさとベッドへ潜り込んだし、ルフトハンザでアルコールを十分配給してくれたので忽ちねむりに落ち、当日は一步も部屋を出なかった筈である。

「このチャージは何ですか？ 利用した覚えがないんだが。」と尋ねてみた。勿論ドイツ語ならざる使い慣れた英語である。デパートでは、英語では通じない部分が多く、苦勞したが、ホテルは大丈夫である。「Mr. Tohchuh no bill desu.」「然し、利用した覚えがないので、支払えないよ。」「Kasoh Tohchuh to sain ga ari, room e charge desu.」「困ったな。じゃ、恐縮だが、伝票を見せてくれませんか？」

驚いた事に、ちゃんと筆者の名前が署名欄に書いてあり、部屋番号も合っている。「これは見た通り、私の署名ではありませんよ。」「Wakarimashita. Dewa joushi ni kiite kimasu.」結果は当然、払わないで済んだが、全く、油断大敵である。

思い起こして見ると、ツアーの場合は、ホテルが、手荷物に客の氏名と部屋番号を記入したステッカーを貼る。此れを狙っている“痴れ者”が、このホテルに居たわけである。一流のホテルと言えども、ぜひ、ご注意を！

つい先日のことである、親しい友人達と杯を傾けながら四方山話を花を咲かせていた。たまたま、海外出張の思いで話になり、こんな経験はメモって置く価値がある、と中の一人が言い出したのも酒のしからしむる技で、この拙文を、衆目に晒さねばならない結果となった次第である。然し、何処へ行っても日本人は狙われがちだそうで、海外出張中にはカルチャー・ショック的な事を回避されるよう、単なる老婆心切である。（冬虫夏草）

うちの会社

エンデルレ書店

エンデルレ書店 専務取締役 エンデルレ・ハンス

当書店は昭和11年開業以来本年56年を経しております。社長エンデルレ・ルーベルトが、はるばるドイツ国フライブルグのヘルデル社より日本に参りましたのはドイツと日本の架け橋たらんとしてのことで、欧亜書房の名称で洋書輸入業務を行い今次大戦で事業所が焼失するまで一応の成果を上げることができました。

戦後エンデルレ書店と改名し輸入業務が許されるや初の洋書輸入第一便を迎えましたことは広く新聞等に喧伝される処となりました。

洋書輸入協会には昭和16年にすでに会員となっており、戦後協会再建後も一員として参加致しております。その後は洋書輸入枠を広げ西欧の他米国の書籍をも扱い近年は特にキリスト教書の輸入に力を入れておりま

す。当店専務エンデルレ・ハンスは書店業務の傍らドイツの大手取次店グロスハウス・ヴェグナー社の代表者として20年来皆様方のお世話になっております。

洋書取扱いの他社長来日の目的の一つに西欧の勝れた著作の日本語訳の出版がありヘルデル社の刊行書を中心に宗教、哲学、教育、語学等の分野に専門書出版を数多く手がけ読者層も厚く、特にキリスト教界にはいささか名の通った出版社の一つに数えられて、その功により社長はローマ法王庁より叙勲されております。他にドイツ語教室を開き20年になります。

ドイツ系の書店として日本の業界に少しでも貢献できますことは私共の大きな喜びであり、ご支援頂いた皆様方に深く感謝する次第であります。...

本郷界隈の坂〔8〕 菊坂と菊富士ホテル(5)

丸善・本の図書館 鈴木 陽 二

◆アメリカにおける黎明期の日本学

日米交流の歴史はあるアメリカ青年のロマンチックな冒険物語で始まる。インディアンを母として生まれたラナルド・マクドナルド(Ronald MacDonald, 1824-1894)は、インディアンの祖先は日本人であるという風説を耳にして母の祖国日本への思いをつのらせたあげく、捕鯨船で働きながら日本近海に至り遭難をよそってポートで利尻島に漂着する。この年1848年(嘉永1)の日本は当然鎖国の時代であったため松前藩に捕らえられ、長崎送りとなって幽閉される。この時彼が持ち込んだ荷物には聖書、辞書、文法書、歴史・地理書など40冊近くの書籍が含まれていたようで、さほど多くない江戸時代の洋書流入では珍しくまとまって到来したケースで、これらの本は「江戸幕府旧蔵洋書」の中などに今でも残っているのであろうか。ともあれ、幽閉中長崎通詞に教えた英語が日本における初めての正統な英語の習得になったもので、この本場英語の教授は日本の英学史上大きな意味を持つ出来事になった。かつて1808年(文化5)イギリス船フェートン号事件で急速英語研修が行われたことを前に紹介したが、この時はオランダ人による、いわば応急の英語学習であった。マクドナルドは翌年の1849年、同じ時長崎に収容されていたアメリカの遭難捕鯨船員とともに本国に送還される。憧れてやって来た国であったが、わずか10カ月の夢破れた幽囚の日本滞在であった。

ちなみにアメリカの捕鯨について触れると、18世紀末には太平洋一帯の広大な地域を漁場として活発な捕鯨を行い、19世紀始めの黄金時代には700隻を越える出漁船が記録されている。1820年頃には日本近海に姿を現すようになったが、日本の沖合を舞台としたメルヴィル『白鯨』にも日本について言及した文が11カ所もあり、その中には捕鯨船の力による日本の開国に近いことを予見する記述も見られる。ペリーと締結した「日本国米利堅合衆国和親条約」にアメリカ船にたいする「薪水食料石炭欠乏の品」の提供や遭難船員の保護が条文化されているが、艦隊派遣の基本計画では特に捕鯨船の保護が重要かつ明確な目的になっていたようである。

さて1853年(嘉永6)、日本はペリーの来航で開国に

踏み切るが、彼が艦隊司令官に任命されるや日本に関する文献を渉猟して研究を行ったようで、3万ドルの大金を政府に要求し、400冊にもものぼったといわれる収集文献の中にはケンペルやシーボルトの原本の写しやそれらをもとに編集された一般向けの日本紹介書“Manners and Customs of the Japanese in the Nineteenth Century”(1841)、グローヴニンやトゥーンベリの著作などが含まれていたばかりではなく、高橋景保がシーボルトに提供して死罪判決となった日本の地図・海図の入手にも手を尽くしたという。ペリー自身の3年にわたる日本・中国への遠征記録は最初ナサニエル・ホーソンに執筆を依頼して断られ、結局フランシス・L・ホークスがペリーの監督で編纂し、1856年に合衆国元老院版として全3巻で発行され日本研究の基本文献となったが、その前年に刊行されたヒルドレス(Richard Hildreth, 1807-1865)の『中世近世日欧交渉史』(Japan as it was and is.)もこの時代の重要文献で、マルコ・ポーロの『東方見聞録』から書き起こしているいろいろな文献を駆使しながら日本の対外政策の歴史と社会構造を総括した、当時としては完成度の高い日本解説書として評判となった。幕末から明治初期にアメリカから主として宣教師がキリスト教の布教を目的に来日する。彼らは宣教のみならず、私立学校の創設や政府のお雇い教師として日本の近代教育発展に大きく貢献したが、同時に日本の文化・風俗や歴史の解説、日本語研究書などを著して日本の紹介に力を尽くした。明治学院を設立したヘボンの『和英・英和語林集成』、東京帝国大学の英文学教師ラフカディオ・ハーンの一連の作品、大学南校の化学教師ウィリアム・E・グリフィスの『皇国』、東京大学の哲学・政治学教師アーネスト・F・フェノロサ『東亜美術史綱』、東京帝国大学で動物学を教えたエドワード・S・モースの『日本その日その日』など挙げれば切りがないが、どちらかというと学問的研究書は多くはなかった。

アメリカで日本研究が組織的に行われるようになったのは1930年代に入ってからであるが、エリセーエフの築くアメリカの日本研究につながるその流れは次回に譲ることにしたい。

ANNOUNCING...

ENCYCLOPEDIA OF

:FOOD SCIENCE, FOOD
TECHNOLOGY

AND NUTRITION, 全8巻

:MICROBIOLOGY, 全4巻

:IMMUNOLOGY, 全3巻

:HUMAN BIOLOGY, 全8巻

:EARTH SYSTEM SCIENCE,
全4巻

:PHYSICAL SCIENCE
AND TECHNOLOGY, 2/e
全18巻

▶ ACADEMIC PRESS DICTIONARY OF SCIENCE AND TECHNOLOGY

「最新科学技術
辞典」

“EXCELLENCE IN SCIENTIFIC REFERENCE PUBLISHING.”

その分野を国際的に代表する研究者の書下ろしに
よる、総説形式「百科辞典」。
読み応えのある解説と便利な索引。

多忙な研究者必携の “ベンチトップ・データブック” “Facts Book Series”

主要な分子ファミリー毎関連する最新の分子を網羅
し、それらの分子量・染色体局在・発現・塩基配
列・物理科学的性質・生物活性・データベースのアクセ
スナンバー／主要文献などの情報をわかりやすいレイアウト
で収録した便利なデータブック。

The LEUCOCYTE ANTIGEN: Facts Book

The CYTOKINE:Facts Book

The ADHESION MOLECULE:Facts Book

The ION CHANNEL:Facts Book

The PROTEIN KINASE:Facts Book

The ONCOGENE:Facts Book

The ECM:Facts Book

The G PROTEIN LINKED RECEPTOR:Facts Book

ご注文・ご照会是最寄りの書店又は、弊社までご連絡下さい。



ACADEMIC PRESS

Harcourt Brace & Co.

株式会社 HBJ 〒102 東京都千代田区一番町22-1 一番町セントラルビル Tel. 03-3234-3911(5) Fax. 03-3265-7186

1993年7月

通巻第314号

洋書輸入協会

編集者 神田 俊二

〒103 東京都中央区日本橋1-21-4 千代田会館5階20号室

☎(03) 3271-6901 FAX. (03) 3271-6920

印刷所—藤本綜合印刷株式会社